

敬和学園大学英語文化コミュニケーション学科 1年生の英語能力・英語学習に関する実態調査(2)

川 又 正 之、上 野 恵美子

はじめに

本学英語文化コミュニケーション学科の学生たちは、いったいどのような目的や意識を持って入学してきたのであろうか。また、中学・高校時代にはどのように英語を勉強してきたのであろうか。さらに、入学後の英語学習にはどのように取り組んでいるのであろうか。

本稿では、昨年度(2017年度)に続き、2018年度入学の敬和学園大学英語文化コミュニケーション学科1年生について、英語能力の実態や英語学習への意識等を明らかにすることを試みる。

英語能力については、2018年4月に行われたプレイスメントテストの結果をもとに、また、英語学習については、2018年10月に行われたアンケートの結果を踏まえて、それぞれ分析と考察を行う。なお、2017年度の英語文化コミュニケーション学科入学生(現2年生)に対しても同様の調査を行っており、その結果についても必要に応じて言及する。

1. 英語能力に関する実態調査—プレイスメントテストの結果について

本学では開学時より英語プレイスメントテストを行ってきており、主に共通教育における英語プログラムのクラス分けに活用されている。¹⁾ 開学からしばらくは専任教員作成の問題が使用されたが、その後外部テストが使用されるようになった。現在はELPA(英語運用能力評価協会)の英語プレイスメント・テストが使用されている。

ELPAの英語プレイスメント・テストは、以下の表に示されている通り、リスニング100点、語彙50点、文法50点、リーディング100点の300点満点(試験時間60分)である。総合スコア及び各分野のスコアは5～1のレベルで表示される。

表1：ELPAの評価基準

レベル表示	総合スコア	語彙	文法	リーディング	リスニング
5	255～300	43以上	43以上	85以上	85以上
4	225～254	38～42	38～42	75～84	75～84
3	165～224	28～37	28～37	55～74	55～74
2	120～164	20～27	20～27	40～54	40～54
1	0～119	20未満	20未満	40未満	40未満

本学英語文化コミュニケーション学科 2018 年度入学生の英語プレイスメントテストの成績分布は以下のとおりである。(2018 年 4 月実施。50 名が受験。)

表 2：2018 年度入学生の結果

レベル表示	総合スコア	語彙	文法	リーディング	リスニング
5	1	5	3	1	5
4	2	6	1	4	4
3	22	17	18	18	28
2	21	19	17	24	12
1	4	3	11	13	1

「一定のレベル以上である」とみなせる「レベル 3 以上」の学生数と、「以下である」と考えられる「レベル 2 と 1」の学生数でくくってみると以下のようになる。

表 3：レベル別表示 (2018 年度入学生)

レベル	語彙		文法		リーディング		リスニング	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
5+4+3	28	56.0	22	44.0	23	46.0	37	74.0
2+1	22	44.0	28	56.0	27	54.0	13	26.0

語彙とリスニングではレベル 5～3 の学生が半数を超えるが、文法とリーディングでは逆にレベル 2～1 の学生が半数以上となっている。

比較参考のため、本学英語文化コミュニケーション学科 2017 年度入学生 (現 2 年生) の結果もあわせて示す。(2017 年 4 月実施。58 名が受験。)

表 4：2017 年度入学生の結果

レベル表示	総合スコア	語彙	文法	リーディング	リスニング
5	2	6	6	5	3
4	5	2	3	5	3
3	19	23	13	15	27

2	23	18	26	22	20
1	9	9	10	11	5

2018年度入学生と同様に、「一定のレベル以上である」とみなせる「レベル3以上」の学生数と、「以下である」と考えられる「レベル2と1」の学生数でくくってみると次のようになる。

表5：レベル別表示（2017年度入学生）

レベル	語彙		文法		リーディング		リスニング	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
5+4+3	31	53.4	22	37.9	25	43.1	33	56.9
2+1	27	46.6	36	62.1	33	56.9	25	43.1

2018年度と同様に、語彙とリスニングではレベル5～3の学生が半数を超えるが、文法とリーディングでは逆にレベル2～1の学生が半数以上である。

ここ2年間のプレイスメントテストの結果を見ても、本学科の学生達については、文法とリーディングが「弱い」傾向が見られる。特に強化が必要な領域であろう。

また、本学科の学生の場合、レベル5及び4の学生の割合はさほど高くなく、レベル3の学生が相当数いることがわかる。レベル1の学生についても英語文化コミュニケーション学科内にも一定数はおり、この学生たちには、学科の学びのための何らかの支援が必要であると考えられる。

2. 英語学習に関する実態調査—アンケート

①調査の概要

(1) 調査の対象と方法

2018年度敬和学園大学英語文化コミュニケーション学科入学生全員に対して、2017年度と同じアンケート調査を実施した。調査には、入学者52名全員が参加した。調査は2018年10月17日の「コミュニケーション入門」の時間を使い、その日の担当者である川又が説明、実施、回収を行った。そのため回収率は100%である。回答は、該当する記号に○をつけてもらう選択式で行い、最後の2つの設問で記述式を併用した。

(2) 調査項目・内容

アンケートの設問は全部で31問。英語文化コミュニケーション学科1年生の「英語学習経歴」と「英語学習に対する意識」の2点を明らかにすることを目的として作成された。個々の設問については、川又・上野(2018)の末尾に資料として掲載されているので、そちらを参照されたい。なお、本アンケートの作成にあたっては、川又(1996)、小田他(1997)を参考にした。

②アンケートの結果と分析

以下、アンケートの設問の順番に沿って、結果の報告および分析を行うことにする。なお、2017年度の英語文化コミュニケーション学科入学生(現2年生)に対しても同様の調査を行っており、その結果についても必要に応じて言及する。

問1から問5にかけては、海外渡航経験について聞いている。

問1：海外へ行ったことがありますか。※留学生(りゅうがくせい)の人は、日本以外の国や地域に行ったことがあれば、「ある」に○をつけて下さい。

ある：25名(48%) ない：27名(52%)

ほぼ半数の学生が「経験あり」と答えている。これは2017年度の調査結果と同様である。

問2：海外へ行った目的は何ですか。

観光：8名 勉強(高校の海外研修も含む)：18名 その他：1名

「勉強(高校の海外研修も含む)」と「観光」が多くなっている。2名は「観光」と「勉強」の重複である。「その他」の1名は「親戚に会いに」と答えている。

問3：海外で生活した通算(つうさん)の期間はどのくらいですか。

1か月以内：23名 3か月以内：0名 6か月以内：0名 1年以内：0名
2年以内：1名 3年以上：0名

「親戚に会いに」と答えた1名以外は「1か月以内」である。

問4：海外で一番長く生活していた地域は次のうちどれですか。

英語圏：18名 ドイツ語圏：1名 フランス語圏：0名 中国語圏：1名
朝鮮語圏：0名 イタリア語圏：1名 ロシア語圏：0名 その他：5名

圧倒的多数は「英語圏」であるが、「ドイツ語圏」および「イタリア語圏」と答えた学生もいた。

問5：海外へ行った時の年齢(ねんれい)は、次のどれにあたりますか。(2つ以上選んでもよい)
6歳未満 (under 6 years old)：4名　　6歳～12歳 (6 to 12 years old)：5名
13歳～15歳 (13 to 15 years old)：4名　16歳～18歳 (16 to 18 years old)：14名
19歳以上 (19 years old and over)：2名

最も多いのが「16歳～18歳 (16 to 18 years old)」の14名であるが、その内「勉強(高校の海外研修も含む)」が13名、「観光」が3名である(2名は重複)。それ以外についても、すべての年齢区分にわたって経験者がいることがわかる。

問1から問5については、2018年度もおおむね2017年度の調査結果と同様であった。

問6から問8では、外国人との接触や本学での外国人教員の授業について尋ねている。

問6：今まで学校以外で英語を使って外国人(がいこくじん)と話をしたりメールやラインをしたりする機会がありましたか。
しばしばあった：15名(29%)　たまにあった：22名(42%)
全くなかった：15名(29%)

7割の学生は何らかの形で接触を持った経験があり、「全くなかった」と回答した学生は約3割である。2017年度に「全くなかった」と回答した学生は36%であったので、今回はやや減少していることになる。

問7：本学では、外国人の先生の英語の授業時間数は
多すぎる：0名(0%)　適切：31名(60%)　少なすぎる：12名(23%)
わからない：9名(17%)

「多すぎる」はおらず、「適切」が6割、「少なすぎる」が2割強となった。「少なすぎる」と回答した学生のうち、問6で「しばしばあった」と回答したのは5名、「たまにあった」が4名、「全くなかった」が3名である。接触経験の多い学生が「少なすぎる」と感じる傾向はあるが、一方で「全くなかった」という学生でも「少なすぎる」と回答する学生がいる。

問8：外国人の先生の英語の授業に

十分ついていける：24名（46%） 何とかついていける：26名（50%）

ほとんどついていけない：2名（4%）

2018年度入学者は、「十分ついていける」と「何とかついていける」を合わせると96%となり、「ほとんどついていけない」と回答した学生は4%であった。「ほとんどついていけない」は、2017年度は9%であったので、やや減少したことになる。共通教育の英語のクラス（KEEP）²⁾については、本稿「1」でも述べた通り、プレイスメントテストの結果に基づいた習熟度別クラス分けがなされているが、これらの学生たちについては、通常の授業とは別の、何らかの支援体制が必要であろう。

問9から問12では、英語の勉強方法や勉強時間等について尋ねている。

問9：英語を今、どのように勉強していますか。その勉強方法として、該当（がいとう）するものを選んで下さい。（いくつ選んでもよい。）

大学の授業の予習・復習：42名 英会話学校：2名 個人教授：1名

ラジオ・テレビ講座：6名 通信教育：0名 CD・テープの使用：11名

新聞・雑誌をよく読む：5名 原書（もともと英語で書かれたもの）を読む：10名

パソコン通信やインターネットなど：15名 外国人が身近にいてよく使う：2名

全く勉強していない：3名

その他 8名（映画、音楽、英検対策、TOEIC 対策等）

「大学の授業の予習・復習」が42名と最も多くなっている。2017年度も同様の結果であった。

問10：大学の授業を大学に来て受けること以外で、一日に勉強している時間を選んで下さい。（授業の予習・復習のための時間を含んでもかまいません。）

30分程度：18名（35%） 1時間程度：16名（31%） 2時間程度：9名（17%）

3時間以上：8名（15%） 未回答：1名

「30分程度」と「1時間程度」を合わせると7割弱である。比較参考のため、2017年度の結果もあわせて示す。

問 10：(設問省略)

30分程度：26名(49%) 1時間程度：21名(39%) 2時間程度：3名(6%)
3時間以上：1名(2%)

2017年度と2018年度を比較すると、「30分程度」が49%→35%(2017年度→2018年度、以下同じ。),「1時間程度」が39%→31%と減少しているのに対して、その分「2時間程度」が6%→17%、「3時間以上」が2%→15%と増加している。より多くの時間勉強する学生が増えたことは喜ばしいが、それでも7割弱の学生の勉強時間は1時間程度以下である。これは大学生としてかなり少ないと指摘せざるを得ず、本学学生の学習習慣が十分には確立されていないことがわかる。

問 11：大学の授業以外で、英字新聞や英文雑誌をどのくらい読みますか。(インターネット利用を含む)

毎日読む：1名(2%) 週に1回は読む：8名(15%) 月に1回は読む：1名(2%)
年に数回読む：12名(23%) 全く読まない：31名(58%)

「全く読まない」が約6割、「年に数回読む」が約2割で、あわせて8割という結果になった。「毎日読む」、「週に1回は読む」という意欲のある学生もいるが、全体的には自主的な学習に取り組んでいる学生の割合は低いと言わざるを得ないだろう。2017年度の結果は以下のようなものである。

問 11：(設問省略)

毎日読む：2名(4%) 週に1回は読む：9名(17%) 月に1回は読む：1名(2%)
年に数回読む：6名(12%) 全く読まない：34名(65%)

「年に数回読む」が12%→23%(2017年度→2018年度、以下同じ。)と増加し、「全く読まない」が65%→58%と若干は減少しているが、「毎日読む」と「週に1回は読む」の割合はあまり変わらなかった。

問 12：授業で使用する教科書以外に、英語で書かれた本を一年に何冊くらい読みますか。

10冊以上：5名（9%） 9～6冊：3名（6%） 5～3冊：7名（13%）

2冊以下：38名（72%）

「10冊以上」という学生が約1割いるが、「2冊以下」が約7割と圧倒的に多い。2017年度の結果も示す。

問 12：（設問省略）

10冊以上：2名（4%） 9～6冊：2名（4%） 5～3冊：13名（25%）

2冊以下：35名（67%）

おおむね同様の傾向であったことがわかる。

この2年間の問10～問12の結果を見ると、本学科学学生の学習習慣の確立と、より積極的で自主的な英語学習への意識をどのように持たせるかが、やはり大きな課題であると考えられる。

問13では、海外留学について尋ねている。

問 13：大学在学中に、勉強のために海外へ行きたいとしますか。（大学の海外研修や個人の短期・長期留学を含む。）

はい：44名（85%） いいえ：8（15%）

8割強の学生が「はい」と答えており、留学への志向が強くあることがわかる。

問 14 と問 15 では資格試験について尋ねている。

問 14：英語に関する資格試験（しかくしけん）を受けたことがありますか。

ある：47名（90%）　ない5名（10%）

※「ある」の人は、その資格試験を書いて下さい。（いくつ選んでもよい）

実用英語技能検定（英検）：45名　TOEIC：8名　TOEFL：0名

国連英検：0名　商業英語検定：0名　その他：1名（資格試験名：TOEIC Bridge）

9割の学生が資格試験を受けたことがあると答えており、その内最も多かったのは実用英語技能検定（英検）の45名である。高校では英検を学校単位で受験させるところがあることと、本学では資格特待生³⁾の要件として英検2級（以上）の取得を求めていること、等が関係していると考えられる。TOEICを受けたと回答した学生も8名いた。

問 15：もし差し支えなければ、その資格試験の結果を教えてください。

（英検2級、TOEIC 580点など）

回答は任意なので全員ではないが、記入をしてくれた学生たちの結果は以下の通りである。

<実用英語技能検定（英検）>

1級：1名　2級：23名　準2級：9名　3級：5名　4級：2名

<TOEIC>

800点台：1名　500点台：3名　400点台：1名　300点以下：1名

2018年度入学生の場合、英検1級やTOEIC800点台を取得して入学してきた者はいなかったの、入学後に取得した、ということであるのかもしれない。（事実は確認できていない。）なお、2017年度については、入学時に英検準1級取得者が1名、TOEIC 800点台達成者が1名いた。

問 16 から問 20 では、自身の英語力に対する自己評価をしてもらった。以下、まとめて結果を示す。それぞれの項目で最も多かった回答には下線を引いてある。

以下の問 16 ～問 20 では、現在の自分の英語力に対するあなた自身の自己診断(じこしんだん)をして下さい。

問 16：聞く力

十分ある：9名 (17%) まあまあある：25名 (48%) あまりない：18名 (35%)

問 17：話す力

十分ある：3名 (6%) まあまあある：29名 (56%) あまりない：20名 (38%)

問 18：読む力

十分ある：9名 (17%) まあまあある：33名 (63%) あまりない：10名 (19%)

問 19：書く力

十分ある：5名 (10%) まあまあある：23名 (44%) あまりない：24名 (46%)

問 20：文法知識

十分ある：5名 (10%) まあまあある：28名 (54%) あまりない：19名 (37%)

「聞く力」「話す力」「読む力」「文法知識」については「まあまあある」という回答が多かった。「書く力」については、わずかながら「あまりない」が「まあまあある」を上回った。しかしながらプレースメントテストの結果では、語彙とリスニングではレベル5～3の学生が半数を超えるが、文法とリーディングでは逆にレベル2～1の学生が半数以上となっており、必ずしも自己診断が英語能力の実態を反映しているとは言い難い面もあるようだ。比較参考のため、2017年度の結果もあわせて示す。

(設問省略)

問 16：聞く力

十分ある：6名 (11%) まあまあある：26名 (49%) あまりない：21名 (40%)

問 17：話す力

十分ある：4名 (8%) まあまあある：16名 (30%) あまりない：33名 (62%)

問 18：読む力

十分ある：2名 (4%) まあまあある：32名 (60%) あまりない：19名 (36%)

問 19：書く力

十分ある：2名 (4%) まあまあある：20名 (38%) あまりない：31名 (58%)

問 20：文法知識

十分ある：3名 (6%) まあまあある：18名 (34%) あまりない：32名 (60%)

「聞く力」と「読む力」については、「まあまあある」という回答が多かった。しかしながら入学時のプレイメントテストの結果を見ると、2018年度入学生と同様、必ずしも英語能力の実態を反映しているとは言い難い。「話す力」、「書く力」、「文法知識」については、約6割の学生が「あまりない」と回答している。

これは、2018年度入学生が、「書く力」のみに対して、「あまりない」と答えているのに対して対照的な結果となっている。

その他、2018年度入学生と2017年度入学生で異なっているのは、「話す力」が「まあまあある（2018年度56%）」と最も高かったのに対して、「あまりない（2017年度62%）」であったこと、また、「文法知識」が「まあまあある（2018年度54%）」であったのに対して「あまりない（2017年度60%）」であったこと等が挙げられる。

2018年度入学生の方が2017年度入学生よりも自己肯定感が強い、とは言えるかもしれないが、入学時のプレイメントテストの結果を踏まえると、(先にも指摘したように)必ずしも自己診断が英語能力の実態を反映しているとは言い難い。このギャップをどのように埋めていくかが、両者に共通して考えなければならない課題の一つであろう。

問21では、英語学習の熱意・度合いを5段階で自己評価してもらった。

問21：あなたの現在の英語学習の熱意・度合いを数字で表すとどのくらいになりますか。数字に○をつけて下さい。				
高い		ふつう		低い
5	4	3	2	1
8名 (15%)	18名 (35%)	17名 (33%)	6名 (12%)	2名 (4%)

「4」と「5」で5割、「3」が3割強、「2」と「1」で2割弱という結果になった。比較参考のため、2017年度入学生の結果もあわせて示す。

問21：(設問省略)				
高い		ふつう		低い
5	4	3	2	1
4名 (8%)	17名 (32%)	22名 (41%)	6名 (11%)	4名 (8%)

「4」と「5」で4割、「3」で4割、「2」と「1」で2割という結果であった。2018年度では、2017年度の「3」が減少した分、「4」と「5」が増加したと考えることもできる。

ただ、兩年度とも「2」や「1」と答えている学生も約2割おり、学習意欲の衰退や欠如が心配される。退学者防止の観点からも、こういった学生たちへの適切な支援が重要であろう。

問22から問25では、大学卒業までに身に着けたいと考えている英語力を選んでもらった。

問22：聞く力	十分聞き取れる：39名（75%） おおむね聞き取れる：11名（21%） 最低限必要な情報を聞き取れる：2名（4%）
問23：話す力	自分の考えを十分話すことができる：40名（77%） 自分の考えをおおむね話すことができる：10名（19%） 自分の考えを最低限話すことができる：2名（4%）
問24：読む力	辞書を引かずに、原書・新聞などが読めて理解できる：36名（69%） 辞書を引きながら、原書・新聞などが読めて理解できる：15名（29%） 辞書を引きながら、最低限必要な情報を得ることができる：1名（2%）
問25：書く力	自分の考えを十分書くことができる：34名（65%） 自分の考えをおおむね書くことができる：16名（31%） 自分の考えを最低限書くことができる：2名（4%）

どの項目においても、最も高いレベルの英語力を身に着けたいと考えていることがわかるが、「聞く力」「話す力」に比べて、「読む力」「書く力」の理想はやや低いということだろうか。なお、2017年度入学生についても、ほぼ同様の結果となっている。

問26では大学卒業後の英語とのかかわりについて尋ねている。

問 26：大学卒業後も英語を役立てたいと思っていますか

はい：45名 (87%) いいえ：0名 まだわからない：7名 (13%)

問 26 で「はい」と答えた人は、次の問 27 にも答えて下さい。

問 27：具体的にどのように役立てたいと考えていますか。

仕事（外資系会社や英語教師など）：33名

語学ボランティアや外国人との交流などのため：18名

その他：3名

卒業後も英語を役立てたいと回答した学生が約9割と多く、やはり将来の職業と結びつけて考えていることがわかる。実際には卒業後の就職先は様々であるが、「語学ボランティアや外国人との交流などのため」と答えた学生もかなりおり、英語の学びがその後の人生にもつながっていくことを示唆している。

なお、問 26 については 2017 年度も同様の結果であったが、問 27 については、先ほどの「語学ボランティアや外国人との交流などのため」と答えた学生が 8 名（2017 年度）から 18 名（2018 年度）と倍増以上となっている。「誰かのために役に立ちたい」と考えている学生が増加しているのは注目すべき点であろう。

問 28 と問 29 では、中学校・高校時代の英語学習について尋ねている。

問 28：中学校・高校時代（junior or senior high school days）は英語は好きでしたか。

好き：35名 (67%) 嫌い：7名 (13%) 好きでも嫌いでもなかった：11名 (21%)

「好き」と回答した割合が7割弱であるのに対し、「好きでも嫌いでもなかった」も約2割いる。「嫌い」とあわせて、どうして本学科に入学したのかを知りたいところである。なお、1名は中学校時代は「好き」、高校時代は「嫌い」と回答している。

問 29：中学校・高校時代に英語をどのように勉強していましたか。その勉強方法として、該当（がいとう）するものを選んで下さい。（いくつ選んでもよい。）

学校の授業の予習・復習：40名 塾・予備校（private cram school）：20名
家庭教師（private tutor）：3名 ラジオ・テレビ講座：5名 通信教育：1名
CD・テープの使用：12名 新聞・雑誌をよく読む：2名
原書（もともと英語で書かれたもの）を読む：6名
パソコン通信やインターネットなど：11名 外国人が身近にいてよく使う：3名
全く勉強していない：5名 その他：（参考書を使って自分で勉強、英検対策）：4名

「学校の授業の予習・復習」が40名と最も多くなっている。「塾・予備校」や「家庭教師」の回答が一定数あるのは、大学受験対策といった意味合いが強いだろう。「原書（もともと英語で書かれたもの）を読む」と回答した学生が6名おり、中学校・高校時代から熱心に英語学習に取り組んだ学生がいることがわかる。一方で、「全く勉強していない」と回答した学生も5名いる。

なお、2017年度入学生についても、ほぼ同様の結果となっている。

問 30 と問 31 は記述式の設問となっている。

問 30：これまで大学入学後に受講した中で、あなたが知的刺激を受けた授業と、なぜそのように感じたのかを書いて下さい。

以下、学生の回答を簡潔にまとめる。

<KEEP A について>

- ・長文の物語を用いた授業
- ・英語で文章を書くこと、文章の書き方を初めて知った
- ・英語の本を読む機会が増えた

<KEEP B について>

- ・英語を話す機会が多い
- ・ネイティブの先生の授業が刺激的。

KEEP A・KEEP B

- ・少人数クラスで質問しやすい。

高校までの授業とは違った新鮮な喜びを覚えるようである。

<その他の授業について>

- ・キリスト教学 — 聖書の内容が気に入った。
- ・基礎演習 — 自分と異なる視点を知れた。
- ・中国語 — 英語以外の言語に初めてふれた

問 31：あなたが大学の学びの中で興味・関心を持っているのはどのようなことですか。また今後、英語文化コミュニケーション学科（もしくは自分の学科）でどのようなことを中心に学びを深めていきたいと考えていますか。自由に書いて下さい。

ここも学生の回答を簡潔にまとめる。

- ・リベラルアーツ教育が好き。
- ・キリスト教学
- ・多面的な思考を身に付けたい。
- ・英語力をつけたい。
- ・英語学、英語の歴史、英文法
- ・文学、文化
- ・仕事で使える専門的な英語を学んでいきたい。
- ・資格取得のための授業
- ・日本語教育
- ・通訳、翻訳
- ・海外ボランティア
- ・児童英語教育
- ・児童文学
- ・留学したい。

「英語力をつけたい／話せるようになりたい」との記載は多かった。やはり実用英語志向は強いことがわかる。

③アンケートを終えて

今回のアンケートの注目すべき点を、2017年度の結果とあわせてまとめると、以下のようになるだろう。

- (1) 本学入学時までには海外渡航経験のある学生の割合が約5割あり、これは2017年度とほぼ同じであった。高校での海外研修等が一般化してきていることがわかる。
- (2) 外国人との接触については、7割が何らかの形であったと答えており、全くなかったという学生は3割弱であった。2017年度は「6割(あり)対4割(なし)」であったので、接触があった学生が少し増えたことになる。いわゆる「二極化」の状況はやや改善されたことになるが、これが一般的な傾向であるのか、それとも2018年度の入学生に限ったことであるのかは、今後の継続的な調査が必要であろう。
- (3) 高いレベルの英語力を大学在学中に身に着けたいとかなり多くの学生が考えているが、大学の授業の予習、復習を含む実際の勉強時間は、毎日1時間程度以下が約7割であった。2017年度の9割よりは改善したといえるかもしれないが、依然としてかなり少ない状況にある。
- (4) 英語を書く力については、あまりない、と回答した学生が46%であった。2017年度入学生が、話す力、書く力、文法知識それぞれについて、あまりない、と回答した割合が6割であったことを考えると、よりプラスの自己評価が行われていることがわかる。しかしながらプレースメントテストの結果を見ると、必ずしも自己診断が英語能力の実態を反映しているとは言い難い面もあり、何らかの意識喚起が必要であろう。また、話す力については、大学在学中に身に着けたい、伸ばしたい、と考えている学生の割合が高く、これは2017年度の結果と同様であった。

アンケートの全体的な結果を踏まえると、英語が得意で毎日の勉強も怠らない学生の割合が3割(2017年度は1割)、大学での勉強や生活に何らかの手を差し伸べる必要がある学生が1割(同1割)、その両者の間に6割(同7割)の学生が存在している、というのが2018年度入学生の実態であろうか。特に、身に着けたいと考えている(高いレベルの)英語力と、実際の勉強時間の差(ギャップ)は2018年度、2017年度に共通して大きく、学習習慣の確立を促す何らかの方策と学生自身の意識の改革が求められよう。

ここ2年間のプレースメントテストの結果を見ても、本学科の学生達については、文法とリーディングが「弱い」傾向が見られる。こういった点を踏まえ、2018年度の「英文法」(英語文化コミュニケーション学科1年生必修科目)の授業については、従来2クラス編成であったものを3クラス編成とし、より少人数できめ細やかな教育ができるように改善を行った。これは2019年度も継続の予定である。

また、「1」でも触れた通り、本学科の場合、プレースメントテストのレベル5及び4に相当する比較的高いレベルの学生はいるのであるが、その割合はさほど高くなく、実

際にはレベル3の学生が相当数いることがわかる。レベル1の学生についても英語文化コミュニケーション学科内にも一定数はおり、この学生たちには、学科の学びのための支援体制の拡充は必要であると考えられる。これについては、試験的な試みではあるが、2018年度後期より、資格特待生の学生が、履修や英語の勉強法について他の学生からの相談を受ける、という取り組みも始まっている。今後の発展に期待したい。後期開講の「コミュニケーション入門」（英語文化コミュニケーション学科1年生必修科目）の毎年度最終授業日は、「学生フォーラム」という形で、留学をしたり就職が決まったりした先輩たちの話を1年生が直接聞く機会も設けている。先輩たちのがんばりが、1年生の英語学習や大学生活に何らかのプラスの効果をもたらすことを願っている。

おわりに―7年一貫制教育の構築に向けて

本稿では、2018年度入学の敬和学園大学英語文化コミュニケーション学科1年生について、プレースメントテストやアンケートの結果をもとに、英語能力の実態や英語学習への意識等を明らかにすることを試みた。本学科ではまさに「多様な」学生を受け入れており、そのような実態を踏まえたカリキュラム編成や授業方法の改善、学習支援体制の構築、さらには学生の学習習慣の確立が大きな課題であることが、2017年度に引き続き明らかになった。

なお、当初は敬和学園高校出身者に特化した分析と考察も行う予定であったが、母数が少なく、個人が特定化されてしまう危険性もあると判断し、本稿にはあえて載せないことにした。この点をご了承いただきたい。今後、個人情報取り扱いに十分留意した上で、高大合同研修会等で活用を図りたいと考えている。敬和学園高校出身者については、高校時代の学びと成長がはっきりとわかることが最も大きな利点である。7年一貫制教育の実現のためには、高校側と大学側の「情報の共有化」が何よりも大切であろう。敬和学園高校には、2018年度、高大連携の一環として三人の英語文化コミュニケーション学科の教員が出前講義を行った。今後もさらに信頼関係を深め、7年一貫制教育の構築に向けての基礎を築き上げていきたいと考えている。

最後に、本研究については、2017 - 18年度敬和学園大学人文社会科学研究所研究補助（題目：「高大7年制教育に向けてのパイロットスタディ（試験的研究）―敬和学園高校出身者の英語力の伸長度調査」 研究代表者：川又正之、研究分担者：上野恵美子）の支援を受けていることを感謝とともに記したい。

本稿は、「はじめに」、「おわりに―7年一貫制教育の構築に向けて」を川又が、「1. 英語能力に関する実態調査―プレースメントテストの結果について」を上野が執筆、一部2017年度の結果を踏まえた加筆を川又が行っている。「2. 英語学習に関する実態調査

アンケート」については、2018年度入学生の結果の集計と分析、および執筆を上野が行い、川又が2017年度の結果を踏まえた加筆を行った。それぞれの担当箇所については相互に確認、検討し、必要な修正を行っている。

註

- 1) 本学の共通教育における英語プログラムのカリキュラム変遷については、川又・上野(2018, pp. 25-27)を参照されたい。
- 2) 「KEEP」は Keiwa Extensive English Program の略で、「KEEP A」が「読む・書く」、「KEEP B」が「聴く・話す」を中心とした授業である。いずれも週90分授業×2コマで(各4単位)、英語文化コミュニケーション学科の学生の必修である。
- 3) 実用英語技能検定2級(以上)の合格者またはTOEIC 550点(以上)達成者は授業料(69万円)を免除するという制度が適用された学生。

参考文献

- 川又正之・上野恵美子 2018. 「敬和学園大学英語文化コミュニケーション学科1年生の英語能力・英語学習に関する実態調査(1)」『敬和学園大学 人文社会科学研究所年報』No. 16, pp. 25-46. 敬和学園大学
- 川又正之・市川真矢・小田寛人 1996. 「常葉学園短期大学英語英文科学生の英語学習・英語能力に関する実態調査(1)」『常葉学園短期大学紀要』第27号, pp. 101-119. 常葉学園短期大学
- 小田寛人・川又正之・市川真矢 1997. 「常葉学園短期大学英語英文科学生の英語学習・英語能力に関する実態調査(2)」『常葉学園短期大学紀要』第28号, pp. 135-148. 常葉学園短期大学